東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

マレーシアにおける日本式教育の位置づけについて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮谷,真一郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173888

マレーシアにおける日本式教育の位置づけについて

前在マレーシア日本国大使館附属クアラルンプール日本人会日本人学校　校長
愛知県一宮市立起小学校　校長　宮　谷　真一郎

キーワード：教育環境、日本式教育、発信、感謝の念、グローバル人材育成

１．はじめに

クアラルンプール日本人学校は、1966年にマレーシアの首都クアラルンプールに開校した、日本人学校の中では屈指の伝統校である。当校は長い歴史の中で教育環境整備が進められてきており、現在、幼稚部から中学部までの「12年間教育」を同じ校地内で行うことができる。また、このような教育活動を支える施設も充実しており、東京ドーム２個分に相当する校地内には、幼小学部と中学部とがそれぞれに校舎を持つほかに、各学部に運動場、プール、体育館等が設置されている。殊に中学部の施設は恵まれており、400メートルトラックが作れる全面芝の運動場、８コースある50メートルプール、2,000名以上を収容できる体育館などが一年中使用できる環境にある。

このように恵まれた環境で教育が行えるのは、在マレーシア日本国大使館、クアラルンプール日本人会やマレーシア日本人商工会議所といった「日本人の先達」の弛まぬ御尽力のお陰である。また、宗教観をはじめとした世界観の異なる日本人が異国の地にて日本の教育を実践することに対し、寛大でいてくださったマレーシアという国や人々にも同様に感謝の念を抱く。

そこで、私は「マレーシアへの恩返しが、クアラルンプール日本人学校に通う子どもたちを豊かにグローバル人材として育成することにつながる」という信念のもと、学校経営を行うことにした。

２．あこがれの国、日本

(1) 日本にあこがれる背景

マレーシアは、マレー半島に位置する西マレーシアとボルネオ島の一部である東マレーシアからなる。マレー半島自体は交易によって栄える地理的条件を備えていた。また、このような地理的条件に加え、地球上で最も古い熱帯雨林地帯であることからスズなどの天然資源に恵まれたり、豊かな土壌によって育まれる果物などの食物も豊富に採取できたりする。そのため、マレーシアはオランダやイギリスなどの欧州列強の植民地支配を長年に亘って受けてきた。

第二次世界大戦後の1957年にはイギリス連邦から独立を果たしたマレーシアであったが、既に多民族社会が進んでいたため、国民の７割近くを占めるマレー人の地位向上には至らなかった。そこで、政府は1971年にブミプトラ（マレー人地位向上）政策に取り組んだ。さらに、マハティール現首相は第４代首相時代に「農業立国から工業立国へ」という目標を掲げ、ルックイースト（東方）政策を打ち出した。殊に彼は日本に強い関心を示し、「日本は極東の島国で、資源も不足している。そのうえ、第二次世界大戦で敗戦国にもなった。しかしながら、豊かな国家へと成長したのは日本の教育が優れているからである」とし、「国づくりは人づくりから」という信念のもと、多くの学生を日本に留学させた。

(2) 親日派としてのマレーシア

2017年度、日本とマレーシアは外交関係を結んで60周年を迎えた。この事実を、日本が第二次世界大戦時にマレー半島に侵攻したことやイギリスからの独立を果たした直後に外交関係を結んだ事実と重ね合わせると、マレーシアの人々の寛大さに心打たれる。

マレーシアの王室が日本の皇室と良好な関係を保っていただけることは、当校にとって大変心強い環境である。

1970年の幼稚部開設時には今上天皇・同皇后両陛下が皇太子・同妃両殿下として御来校賜り、2017年度の入学式には、皇太子殿下の御来校を賜った。在校生はもちろん、その保護者や担当教員にも親しみを込めてお言葉

を賜ることは、海外で不安を抱え暮らす日本人にとってこの上ない励みとなる。

そして、「物質面で豊かであり、人々の生活が中流以上」ということはもちろん、戦後の急激な成長を遂げた日本であるにも関わらず、「清潔で、美しい国づくりも損なっていない実社会」は驚きの目で見つめられている。とりわけ、阪神淡路大震災や東日本大震災などの未曽有の大災害時に見られた「日本人の思いやり溢れる国民性は驚愕に値する」というのが専らの捉えられ方である。そのため、「マレーシア人が行ってみたい憧れの国」に日本は常に上位にランク付けされている。

皇太子殿下訪馬記事　於：星州日報

３．日本人気質のよさを発信する

「今日から当校に通うことになっても、日本にいるときと何も変わらない」授業を実践し、学力を保証することは当たり前のことである。そのために、時流に即した研究テーマを立ち上げ、全国から集まった優秀な教員集団の力量が生かせるOJT（On-The-Job Training：現任訓練）体制を整えた。それは、年間100回を目標とした「自主研究授業」を可能にする取り組み方や教科指導を生かした「研究組織の構築」である。また、少経験者の力量向上を目指した初任者等研修で講師となる教員の力量向上が図れる校務分掌も組織した。一方、特に海外で学ぶ中学部生徒や保護者にとって大きな不安材料となるのが「進路決定」である。このことについては、高等学校説明会のあり方を模索するなどして「自己決定力の醸成」を目指した取り組みを進めている。

このように「日本で受けられる教育」と同等の教育が行える環境を順次整備してきた。さらには、海外校としての特色ある教育活動にも積極的に取り組んできた。そのため、尽力する教員の姿を目の当たりにし、日々の学校生活を充実させようとする児童生徒が殆どとなっている。しかし、これだけでは海外で学ぶものとしての利点を生かしたとは言えず、まして地球規模で活躍し、貢献できる人材に育つのに十分であるとは思えない。そこで、「マレーシアへの恩返し」を念頭に置き、「日本文化にふれることにより他者が喜びを享受できる活動」を実践した。

(1) 子どもたちから地域への恩返し

①日本文化の披露（クアラルンプール盆踊り大会への参加）

毎年、日本人会主催の盆踊り大会が開催され、40,000人を超す参加者がある。野球場を借りきっての盆踊りであり、クアラルンプール近郊に住むマレーシアの人々にとっては日本文化に触れるまたとない機会である。その檜舞台である中央櫓上で、当校の中学部３年生男子が和太鼓を奏し、その周囲では中学部３年生の女子生徒が模範を舞う。また、事前に踊り方を伝授した当地の交流校の生徒が十重二十重に輪を作り、盆踊りを盛り上げる。

②先人への敬意（日本人墓地での清掃活動）

毎学期１回、小学部高学年の児童と中学部生徒に自主的参加を促し、日本人墓地の清掃活動を行う。具体的には、草むしり後に墓石や墓碑に花を手向け、線香を供えることで先人に敬意を払う。そして、日本人会役員の方から、墓地の由来や先人の努力について講話を聴く。

(2) 教員から地域への恩返し

①日本文化の披露（日本語教室の開催）

多くのマレーシアの方が日本への旅行を計画していたり、日本のアニメに興味を持っていたりする。そのため、「より身近に日本の文化を感じたい」と願うマレーシアの方は少なくない。そこで、このような願いに応えるために、毎年「日本語教室」を開催している。具体的には、応募者の中から約100名を抽選で選び、全教

員がボランティアで日本語や日本文化について指導を行う。研修会は9月の第1週から毎週1回1時間の合計8回で行い、最終日には研修で学んだことを披露しあう「学習発表会」を行う。その際、天ぷらやお寿司などの日本食に舌鼓を打ちながら、和気あいあいとしたなかで成果発表を楽しんでもらう。

②他者を思いやる心（PTA 活動へのサポート）

最も身近な地域住民が保護者である。そして、その保護者の理解と協力がなくては、学校の円滑な運営は難しい。しかし、大半の保護者は日本でのPTA 活動未経験者である。一方、不慣れな海外生活や子育てへの不安から、学校教育への期待や要求は日本と同じかそれ以上となる。ただ、このような状況でも、学校教育に協力的な姿勢で臨んでくださる方が多い。そこで、より多くの保護者の安心は子どもたちの安定を生み、より円滑な教育活動の実践に結びつくと考え、PTA 活動への支援を強化した。具体的には、校長と教頭が「不安を放置しない」姿勢で「傾聴」を基本的な構えとし、「支え合う」を合言葉に、子どもたちのために課題解決の方策を共に考える「仲間」としての関係作りに取り組んだ。主には毎月行われるPTA 代表者会での協議事項について相談に乗ることであり、他にも様々に寄せられる相談内容については報連相の徹底をお願いした。

③社会的弱者を思いやる心（運動会や学習発表会でのサポート）

当校でも運動会や学習発表会を行う。そのため、孫の活躍を一目見ようと日本から年配の方も多数来校なさる。あるいは、小学部低学年や幼稚部に在籍する子どもを持つ母親は乳児を抱えながらの来校となる。しかし、年間平均気温35度を超える当地である。年配の方や乳児にとっては体調管理が難しく、幼子が急に泣き出さないとも限らない。そのため、日本から来校された年配の方や乳児を抱えた母親は思うような参観ができない。また、障害者を家族に持つ保護者も同様である。そこで、中継映像が見られるエアコンの効く部屋や授乳室を用意し、来校なさる方々が皆安心して参観できる体制を整えた。

４．日本式教育のよさを発信する

マレーシアの人々は日本式教育へのあこがれを強く持っている。このことは以前講義を行った大学生が発した「日本式教育を学ぶことによって、新たな国家づくりに貢献したい」という言葉からも感じられた。そのため、日本式教育のよさについて発信することは「マレーシアへの恩返し」の最たるものであると考えた。しかし、その発信に当たり、日々子どもたちのために必死に教育活動を行っている教員に、日本の学校教育全般に係る重い責任を担わせることは忍びなく感じた。そこで、日本式教育のよさの発信を兼ねた「日本の教育と日本人気質」についての講義等を自ら行うことにした。具体的には、以下の通りである。

・平成27年度に来校されたイスラム教学園の理事長及び校長15名に対し、「日本人気質と日本の教育」について講義を行った。

・平成28年度に来校した私立大学の心理学教室のゼミ生40名を対象に、「日本人の思いやり」について講義を行った。

・同年、私立有名進学女子高等学校を訪問し、生徒200名を対象に「日本の国土と日本文化」についての講義を行った。

・平成29年度には、当地にて伝統と格式を誇る男子全寮制公立学校からの依頼を受けて、当校で代表生徒12名を対象に「日本文化と日本の教育」について講義を行った。また、訪問校からの依頼もあり、講義に先立って日本式教育を体感する目的で、実際に当校生徒ともに清掃活動を体験させた。

日本文化を学ぶ学生　於：日本文化資料室

「日本人は、狭い国土で、限りある少ない資源を有効に活用しながら、生活を営んできた民族です。何

一つ不要なものはないことはもちろん、ものを大切に扱うことを幼い時から教育として受け、その価値観を身につけます」

「お互いに助け合いながら、お互いの価値観を尊重して生きていかないと、狭い国土では全ての人が幸せな生活を営むことができません」

これら二つのことは、全講義で伝えたエッセンスである。これらのことは話だけではなく、体感しやすくなると考え、訪問を受ける場合には必ず「昼食」と「清掃」の様子も参観あるいは参加していただいた。

私の講義は凡そ90分であった。拙い英語で日本文化や日本式教育について語った。英語力と話術に自信のない私は事前に用意をしたパワーポイントで資料提示をしながら、「マレーシアの人々が幸せになるように」とひたすら願い、「日本文化や日本式教育のよさ」を発信した。

５．おわりに

マレーシア現首相であるマハティール氏は、自著のなかでこのように述べておられる。

「周辺の貧しい国々の人々に働く場をマレーシアは提供します。マレーシアだけが豊かになっても意味がありません。東南アジアに暮らす人々が皆豊かになることが大切です」

この信念を現実化するべくマハティール氏が選んだ国家が日本だった。そのため、「東南アジアを世界一豊かな地域へと導ける国民」として日本人は今も期待されている。このことへの確信はマレーシアでの出会いや過ごす時間の量に比例し、強くなった。私は日増しに募るこの思いに駆られ、ついに派遣期間中に実践を試みた。具体的には、「世界を舞台に活躍する日本人の方に触れる機会」を設け、「世界を身近に感じる瞬間」を子どもたちに体感させることである。

私が第１回目の実践で招聘した講師は、在マレーシア日本国特命全権大使でいらっしゃる宮川眞喜雄全権大使である。大使には、「国際人として活躍するために必要な日本人としての資質」と題して講義をいただき、生徒からの質問に答えていただくという特別授業をお願いした。

当日は、広い体育館を特設教室として整えた。宮川大使は、生徒が語る「私の考える世界のリーダーとしての日本人」をじっとお聴きになられた後、自らの学生時代を振り返りながら、座右の銘について語られた。その内容はもちろん、公務でお忙しい中にも関わらず、「子どもたちの将来、日本の未来のために」との依頼を快諾いただいた宮川大使の姿勢に、生徒らは「世界を舞台に生きるために必要なものを日本式教育の中で培える感覚」を掌中に収めたと感じた。

大使の特別授業を受ける中３　於：体育館